

## 編集後記

最近の世の中はいろいろなもののライフサイクルが短くなっているようです。パソコンは1年に4回ほどモデルチェンジがあるのが普通ですし、携帯電話なども数か月ごとにモデルチェンジしているようです。歌謡曲(この言葉は現在は死語でしょうか?)についても、一人の歌手が1年に何曲も新曲を出しており、新曲が出れば、古い曲はほとんど忘れられる運命にあります。我々には新曲を覚えている時間的余裕は全くありません。「まあ、3か月もすれば次の曲が出てくるのだから、覚える必要もないか」と、負け惜しみを言ってあきらめるしか仕方がありません。昔のように何年も歌い継がれるような曲はなくなってきています。数か月の間CDを売るだけの、消耗品になっているのではないのでしょうか。長い間歌い継がれていつまでも人々の心に残るような歌は今後非常に少なくなっていくのではないのでしょうか。歌も完全に消耗品の文化になってしまったようです。最近の学生が将来おじさん、おばさんの世代になって、若い頃を思い出して歌う歌は何でしょうか。興味があります。

これに関連付けるには少し飛躍があるかも知れませんが、一部の学生の勉学の姿勢を見ていて、それに近いことを感じる場合があります。私の担当科目についての勉強の傾向を見てみると、内容を深く考えて理解しようとしなくて、ただ無理やり丸暗記をする、数式の意味などあまり考えないでとにかく丸ごと暗記をしてしまうという傾向が一部にあるようです。演習問題の解法などをすべて暗記して試験に臨み、「とりあえず」試験に合格することを目指すわけで、そのようにして暗記したものは、試験が終われば、完全にリセットされてしまう記憶であります。将来役に立つ知識ではなく、一度だけ頭に入って消えていく単なる消耗品の記憶に過ぎないように思います。最近の学生は「とりあえず」という言葉をよく使いますが、「とりあえず」試験に合格すれば良い、「とりあえず」卒業できれば良いという考えの学生も少なからずいて、それらの学生は「とりあえず」そのような勉強をするようです。「とりあえずの勉強」と「消耗品の記憶」のセットがあまり一般化すると、本質的に深く学問を追求しようとする習慣が無くなり、本当に必要な知識を身に付けたり、継続的に勉強する姿勢を身に付ける、あるいは物事を深く考えることによって得られる創造性を身に付けることが難しくなるように思います。このような傾向を少しずつでも変えていく必要があると思います。

今回、大学教育研究センターでは「中部大学教育研究」第3号を発行することが出来ました。前号に引き続いて本学客員教授の寺崎昌男先生には「大学教師」とは何かについてお書きいただきました。また、研究論考として杉本和弘教授、三浦真琴助教授(現、静岡大学教授)に投稿いただきました。「教育資料・実践報告」として各学科・教室で工夫しておられる教育方法の改善について多くの実践報告がなされています。学生のPC所有に向けての方針、さらに海外で研修中の先生方から海外の大学における教育・研究環境などについてご報告をいただきました。そのほか貴重な情報およびエッセイを寄せていただきました。本ジャーナルが本学における教育研究に関する重要な情報を集約する媒体として定着しつつあるものと考えられます。

大学教育の本当の効果は、学生が卒業後10年、20年経ってから現れるものだと昔

から言われているように、教育評価は非常に難しい側面を持っています。しかしながら、教育改善に向けてベクトルを合わせて行かなければならないと思います。本ジャーナルがそのためのお役に立てばと願う次第であります。

2004年1月

(加 藤)